

◎：この小論では、両親（夫婦）を含む、（2～3世紀の）「初期天皇の系譜」を復元（完成）させることがメインテーマになります。

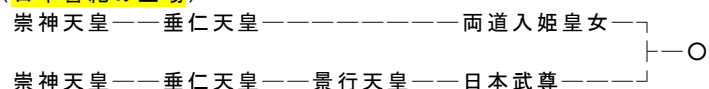
<古事記（天武天皇）の主張>：卑弥呼没後、イザナギとイザナミで大八嶋国を作り、天孫ニニギ尊（景行天皇）が纏向で即位した。

※：シンメトリック論の解説から、日本書紀の系図は、（編さんの初期においては）孝霊天皇を起点にして作られていることが分かりました。

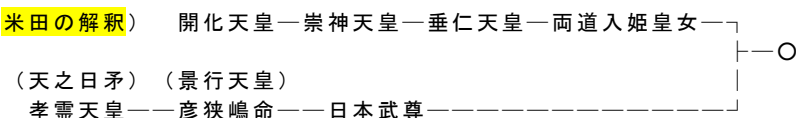
__：（「16/YXRFBRM」氏が発見したシンメトリック論：孝霊紀から壬申紀までは、133/60/68/99/121/121/99/68/60/133 と区切れて面白い。）

__：系図解説では、景行天皇に注目して、「景行天皇=彦狭嶋命」にすると、系図としておさまりが良いことをこれまでに説明してきました。

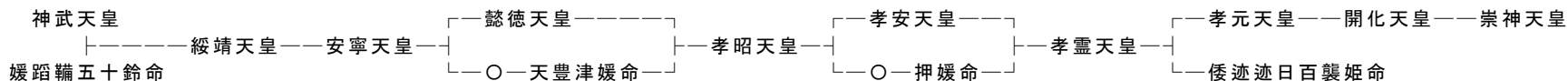
（日本書紀の立場）



（米田の解釈）



※：日本書紀が主張する「初期天皇の系譜」。



※：上記の系図は、初期10代の天皇の系譜になります。

__：同時代の他の豪族の系譜が、みな約6世代に収まっていることや、10代目の天皇が「ハツクニシラス（初代）天皇」であることから、

__：（記紀の続柄から導きだされる）この系譜の信ぴょう性には、問題がありました。

（目次）

- P-01・・・はじめに
- P-02・・・各部族の、始祖伝承の比較
- P-03・・・系図復元の作業の方向性
- P-04・・・「女系の系譜」「天孫降臨」と「神代」の扱いの変遷
- P-05・・・<日本書紀の二つの「一書」と古事記の記述の比較>
- P-06・・・<神武東征と饒速日命のエピソードと「天の磐船」>
- P-07・・・<『先代旧事本紀』から見た、「初期天皇の系譜」>
- P-08・・・<「物部氏・尾張氏・中臣氏」と、新羅王族の関係>
- P-09・・・巻第五天孫本紀 物部氏系譜
- P-10・・・<日本書紀、本文と一書による、「初期天皇の系譜」>
- P-11・・・<『新羅本紀』の人物たちによる「初期天皇の系譜」>
- P-12・・・<『三国史記』の人物たちによる「初期天皇の系譜」>
- P-13/14/15_<3世紀～5世紀の復元した系図>
- P-16・・・<紀元前1世紀ころの「朝鮮半島の系図」>

◎：日本書紀は、「一書」を併記していることから、いろいろな部族にある神話を寄せ集めて、並べている可能性があります。
__：「神名は、複数の人物のイメージではあるが、（系図解説によって）時代を特定することは出来る。」←：これが、私（米田）の立場です。

〔
（天武天皇10年：681年）：○皇子・○王・上毛野君・忌部連・安曇野連・難波連・中臣連・平群臣に詔して、帝紀を記し定した。
：中臣連大嶋と平群臣子首が筆をとって録した。
（持統天皇5年：691年）：18氏に詔して、その祖の墓記を上進させた。
〕

※：私は、日本列島で、王を出した部族（男系）は、忌部氏・中臣氏・安曇野氏・大国主命の子孫である天智（孝元天皇）系と天武（彦狭嶋命）系の
__：各部族と考えています。ですので、各部族の、始祖伝承を持ち寄って、日本書紀（古事記）は、出来ていると考えています。

※：日本書紀の編纂の流れを考えてみます。
__：日本書紀の原型は、蘇我蝦夷の作った「天皇記」だろうと思います。それも基にして、天武天皇が作った「帝紀」が
__：（天武天皇の時代には）ある程度完成していたはずですが、天武天皇が、亡くなって、持統天皇の時代になります。
__：持統天皇は、天智（孝元天皇）系ですので、天智系が有利になるように、改ざん（横やり）を入れたと考えています。
__：そのあと、藤原不比等も横やりを入れたように見えます。つまり、何回も編集方針の変更があったために、
__：「神武が曾祖父ニニギの故郷の高天原に東征する」という、おかしな文章になったのだと思います。

<忌部氏と安曇野氏の主張>※：日本書紀の一番古い伝承を持っている。（解明は不十分ですが、「イザナギ」・「天照大神」の神話の原型。）
<持統天皇（天智）の主張>※：卑弥呼没後、イザナギとイザナミで国を作り、「台与（鬘色謎命）」と皇孫ニニギ尊（孝元天皇）が国を治めた。
<古事記__（天武）の主張>※：卑弥呼没後、イザナギとイザナミで大八嶋国を作り、天孫ニニギ尊（景行天皇）が纏向で即位した。

<藤原氏（天神系）の主張>※：風土記に出てくる「伊賀津臣命」を「日子波限建鷦葦草葺不合命」とし、「天女の妹」を「玉依毘売」
__：（＝「高忍日賣大神」）とし、息子の「梨迹臣命」（または、「大矢口宿禰」）を初代天皇とする。
__：（物語としては、「高忍日賣大神」の<ウィキペディア>を参照して下さい。）

<物部氏と尾張氏の主張> ※：風土記：伊勢の国は、天御中主尊の12世の孫の天日別命（葉江）が平定した所である。
__：（藤原氏によって、先祖伝承を利用され、系図そのものも乗っ取られすり替えられた。）

〔
（一書：綏靖）（一書：安寧）（一書：孝安）（←：「一書」は妥協案か）
（天御中主尊9世の孫）—天押雲命—天種子命—宇佐津臣命—御食津臣命—伊賀津臣命（彦ナギサ）—神武天皇：藤原氏（天神系）の主張
天児屋根命—
—忍穂耳命—饒速日尊—宇摩志麻治（12世の孫：天日別命・葉江）：物部氏と尾張氏の主張
↑（この時代の話）
忌部氏か安曇野氏の「天つ国の神武天皇」—「日子八井耳命（独身の卑弥呼：古事記）」：忌部氏と安曇野氏の主張
〕

※：「神武東征」という話は、（日本書紀では、）忌部氏か安曇野氏の「天つ国の神武天皇」が、物部氏の「饒速日尊・宇摩志麻治」を
__：征服したというお話になっています。けれども、（実際には、）九州の物部氏の「饒速日尊」が、「天の磐船」で畿内にやって来た、という話です。
__：つまり、「神武東征」は（『先代旧事本紀』の伝承を利用した）「饒速日尊」がやって来て、「饒速日尊」が降伏したという、自作自演のお話なのです。

◎：この小論では、両親（夫婦）を含む、（2～3世紀の）「初期天皇の系譜」を完成させることがメインテーマになります。

※：系図のごまかしのテクニックとしては、次のようなものがあります。

（続柄表記として、）異父同母兄弟（連れ子）の混入。夫婦同名（すり替え）。豪族の乗っ取り（すり替え）。一世代ずらし。
（大きなところでは）物語の細かなねつ造（「黒速」による「天の磐船」、つまり、大きな船による畿内への移動はあった。）
神武東征は、ほかのモデルを物語に使いながら、系図的には、一書での「黒速」を神武天皇にしている。

※：私の作業としては、（はじめに）日本書紀（本文・一書）や古事記・先代旧事本紀が主張する、天皇の系譜を並べていきます。
（つぎに__）それらと比較検討し、（すべて正しいとして）合成します。
（さいごに）夫婦同名や娘婿の実子扱い・連れ子の混入を加味して、「初期天皇の系譜」（全体像）の復元を目指します。

※：復元される系図は、大筋としては（かなりの部分で）、記紀（・『先代旧事本紀』・『古代豪族系図集覧』）の主張に準拠しています。
__：そして、復元される系図を「大きなパズル」と考えると、どうしても、小さなピースが不足しています。
__：系図の復元にあたっては、『三国史記』や南堂朴昌和と彼の遺稿（婆娑尼師今記）の記述を使って、ピースの不足を補っています。

※：（異父同母兄弟を書き込んでいるので）復元された系図は、かなり複雑です。
__：（バグが残っているかも知れません。また、私が間違えているかも知れません。）
__：ですが、記紀の主張を最大限に取り入れて、系図を合成しています。

※：復元された系図を、印刷されて、記紀を片手に、続柄をマーカーでたどっていただけるとありがたいです。

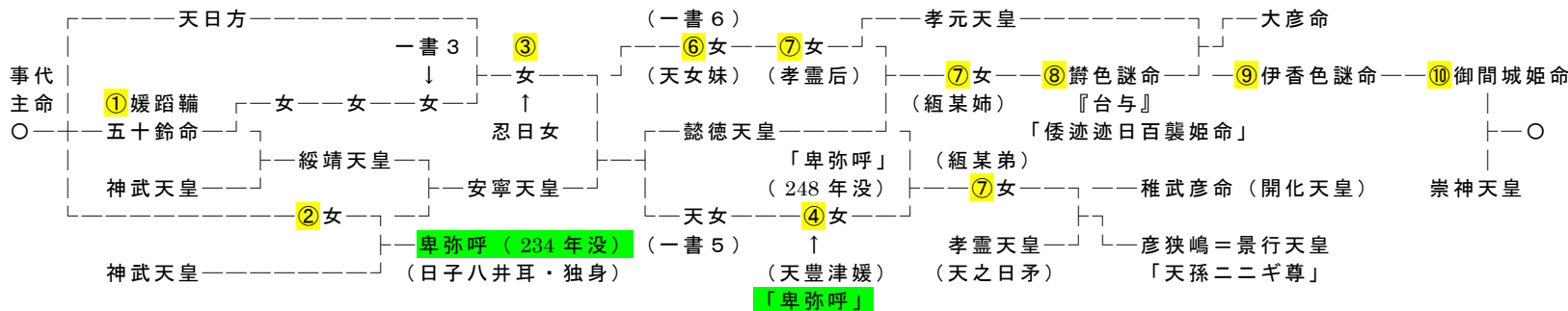
※：<「天照大神」は、女性か男性か。>
__：日本という国は、「天照大神」から「持統天皇」の時代まで、ずっと、女王の国（太后が支配する国）だったと（私は）考えています。
__：日本書紀は、その「女王国（太后支配）の歴史」を「天皇の歴史」に書き換えています。
__：各部族（男系）の始祖は、当然、男性です。（この国の歴史は、同じ腹から生まれた異父同母兄弟を抜きにしては、考えられません。）
__：歴史の改ざん（編さん）の中で、「天照大神」を男性とする考え方が出てくることも、理解はできます。ですので、否定はしません。

※：<「天之日矛」について>
__：「天之日矛」を新羅王の「味鄒尼師今」に、（私は）特定しています。（来帰した天日槍は、「味鄒尼師今」の息子にしています。）
__：もっと云いますと、「天之日矛」＝「塞曹掾史張政」＝「味鄒尼師今」と、考えています。（記紀は、時々、父子ずらしをして誤魔化しています。）

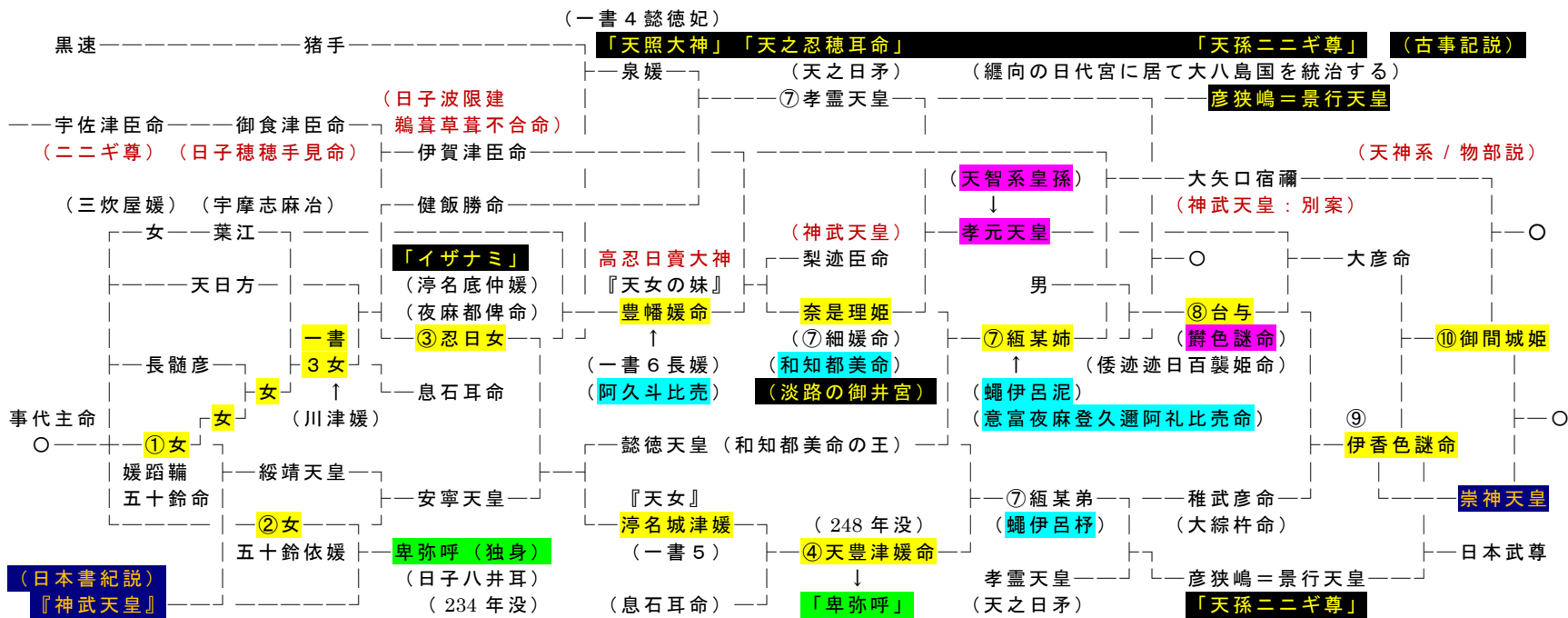
※：多婆那国で生れた「脱解」をはじめ、日本列島で生れた人物（事代主命など）が、韓半島と大八島国（やまと）を行ったり来たりしています。
__：これらについては、夫余（高句麗・新羅）の六加（五族）の支配地域に、日本列島も入っていて、各部族の栄枯盛衰が絡んでいる様に思います。
__：（狗邪韓国や狗奴国は、「狗（犬）」ですから、後漢書夫余国伝の「狗加」に属していたと考えられます。）

◎：ということで、最後に、復元した「初期天皇の系譜」の系図と、『三国史記』に登場する人物を、（すり替えて）重ねてみました。

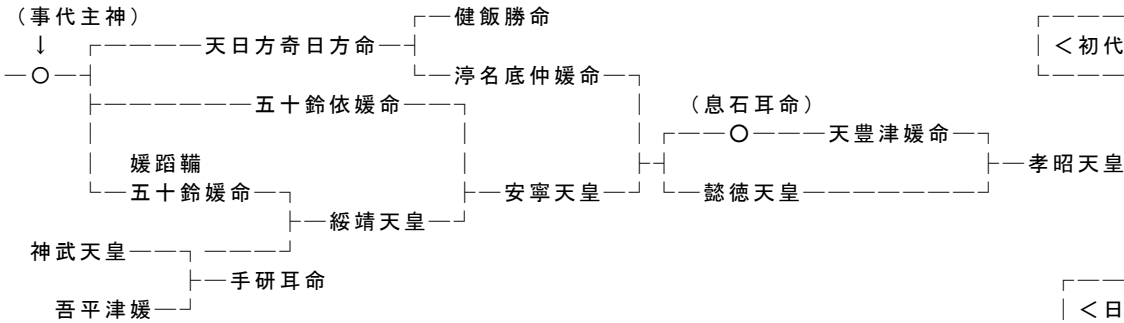
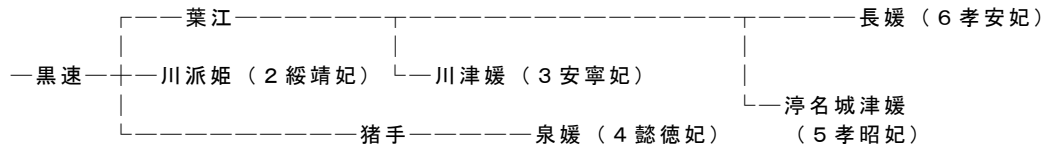
◎：「女系の系譜」と「天孫降臨」：（日本書紀の記述を中心とした）「神武天皇」の後から「崇神天皇」の後までの系譜。



◎：「欠史八代」における「神代」の扱いの変遷：（初期：天武系古事記説）（中期：天神系 / 物部説）（後期：日本書紀説：妥協説）

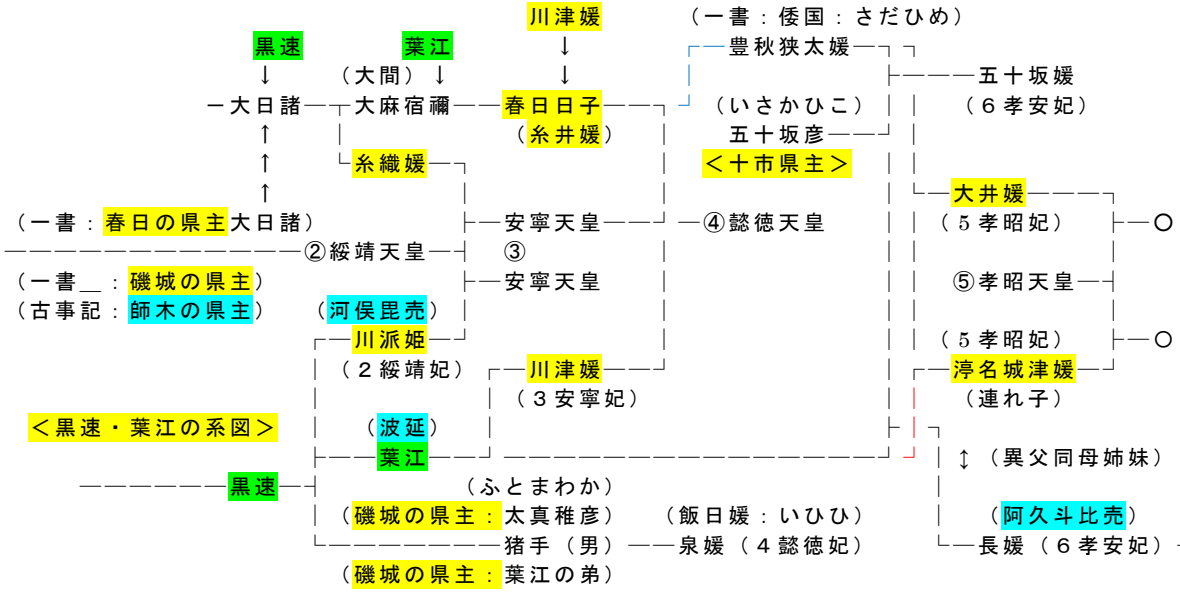


< 2代から6代の日本書紀の「一書」の構造 >



< 初代天皇から5代天皇までの日本書紀の本文の構造 >

< 日本書紀の二つの「一書」と古事記の記述の比較 >

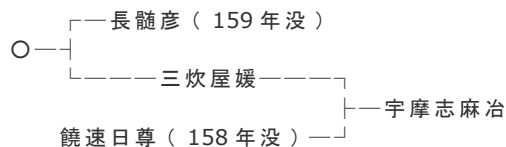


※：『古代豪族系図集覧』によると、
 一書：伊香色雄命の子「建新川」が、
 古事記：倭志紀（しき）県主祖になっています。
 一書：ですので、伊香色雄命以前には、
 古事記：「県主」は、いなかったと思います。

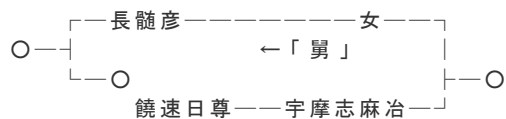
※：二つの一書は、ほぼ同じ人物を
 一書：指していることが分かります。
 古事記：「五十坂彦」の娘たちについては、異父
 古事記：同母姉妹（連れ子）だろうと思います。

※：古事記によると、「和知都美命」は、
 一書：天皇でないのに、「宮」を構えています。
 古事記：「和知都美命」は、淡道（淡路）に居た
 古事記：皇后（妃）だろうと思います。

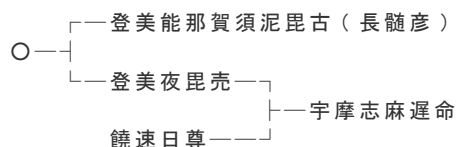
< 神武天皇の東征（物語）の中での、宇摩志麻治の「系図・続柄」は、すべて正しい。 >



「日本書紀」
 饒速日命は、長髓彦の性質が反抗的で、
 天と人との際を教えてもだめと見て、殺した。
 饒速日命は、その衆をひきつれ帰順した。



「先代旧事本紀」
 長髓彦は、「天神の御子は二人も居る訳が無い。」
 天孫の軍は連戦したけれども勝事が出来なかった。
 この時、宇摩志麻治命は舅の作戦に従わず、
 帰ってきたところを誅殺した。そして、
 （宇摩志麻治命は）衆を率いて帰順された。

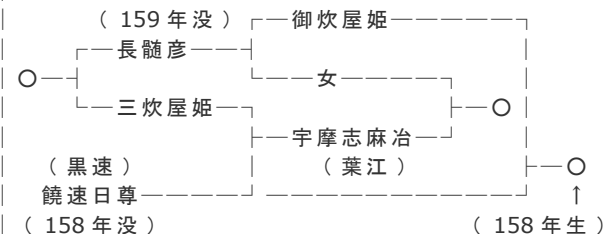


「古事記」
 登美毘古を殺したのは、神武天皇。邇芸速日命は、
 神武天皇のもとに参上した（帰順した）。
 邇芸速日命が登美毘古の妹の登美夜毘売と
 結婚して生んだ子は宇摩志麻遲命である。

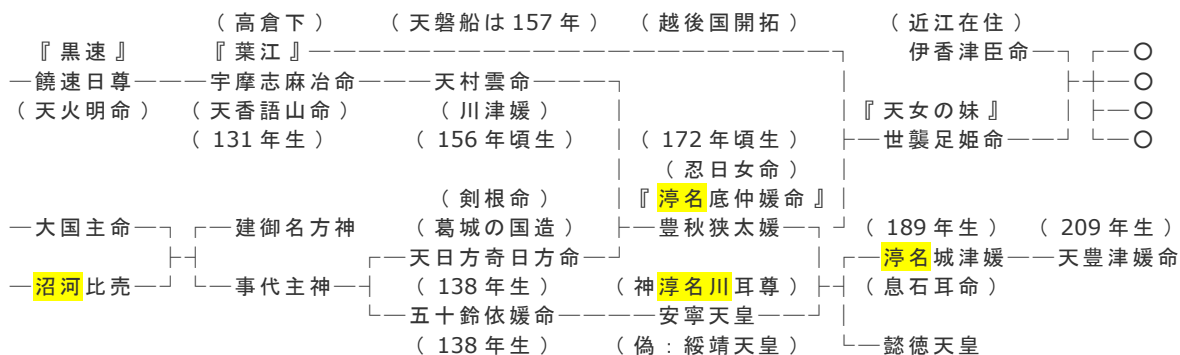
神武天皇による東征は、なかったと思いますが
 饒速日尊の天磐船は、157年にあったと思います。

「先代旧事本紀」
 饒速日尊は天磐船にのって、河内の国の河上の
 哮峰（いかるがのみね）に天下った。大倭の
 国の鳥見の白庭山（しらにわのやま）に移った。
 饒速日尊は長髓彦の娘の御炊屋姫を娶り、
 懐妊させた。（子どもが）生まれる前に、
 饒速日尊はお亡くなりになった。

※：左記三書の合成図

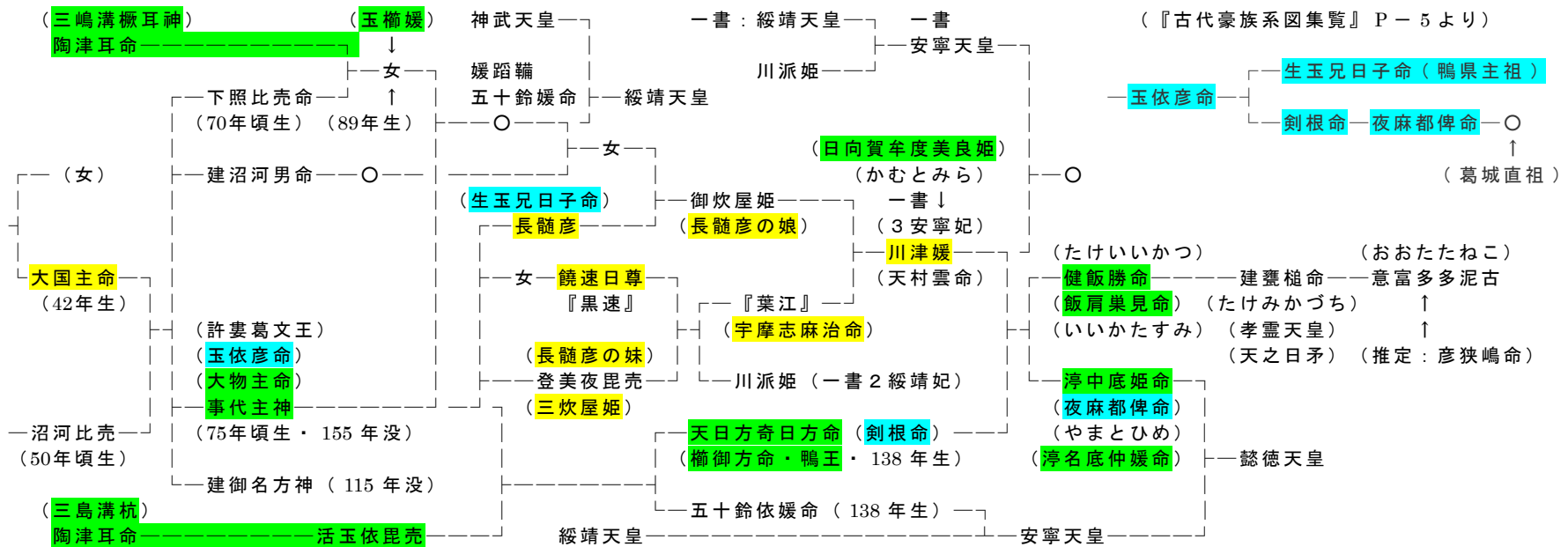


※：風土記によると、天御中主尊の12世の孫の「天日別」が伊勢を平定しています。157年の饒速日尊の天磐船は、船による移動ですが、
 一：「天日別」＝「葉江」とすると、「葉江」や「長髓彦」による「東征」の可能性はあると思います。：倭国大乱：桓帝・靈帝（147～189）



（WIKI）
 沼河比売（ぬなかわひめ、奴奈川姫）は、
 『古事記』の大国主の神話の段に登場する。
 八千矛神（大国主）が高志国の沼河に
 住む沼河比売を妻にしようと思い、
 高志国に出かけて沼河比売の家の外から
 求婚の歌を詠んだ。
 翌日の夜、二神は結婚した。
 『古事記』にはこれ以外の記述はないが、
 新潟県糸魚川市に残る伝承では、
 大国主と沼河比売との間に生まれた子が
 建御名方神で、姫川をさかのぼって
 諏訪に入り、諏訪大社の祭神になったという。
 『先代旧事本紀』でも建御名方神は
 沼河比売（高志沼河姫）の子となっている。

※：「ぬな」は、高志国に関係する名前だと思われます。



<『先代旧事本紀』(地祇本紀)より>

都味齒八重事代主神(つみはやへ__ことしろぬし)：三島の溝杭(みぞくい)の娘の活玉依姫の元に通い一男一女を生む。
 (子)：天日方奇日方命(くしひかた)この命は檀原の朝の御世に勅を受け食国政申大夫と成って共に奉る。
 (子)：五十鈴依媛命(いすずよりひめのみこと)：この命は綏靖天皇が立てて皇后とし、一児(安寧天皇)を生む。

天日方奇日方命(くしひかた)：この命は日向の賀牟度美良姫(かむとみらひめ)を娶り一男一女を生む。
 (子)：健飯勝命(たけいいかつのみこと)
 (子)：淳中底姫命(ぬなそこひめのみこと)この命は、安寧天皇が立てて皇后とし四児を生む。

<『古事記』(崇神天皇記)より>

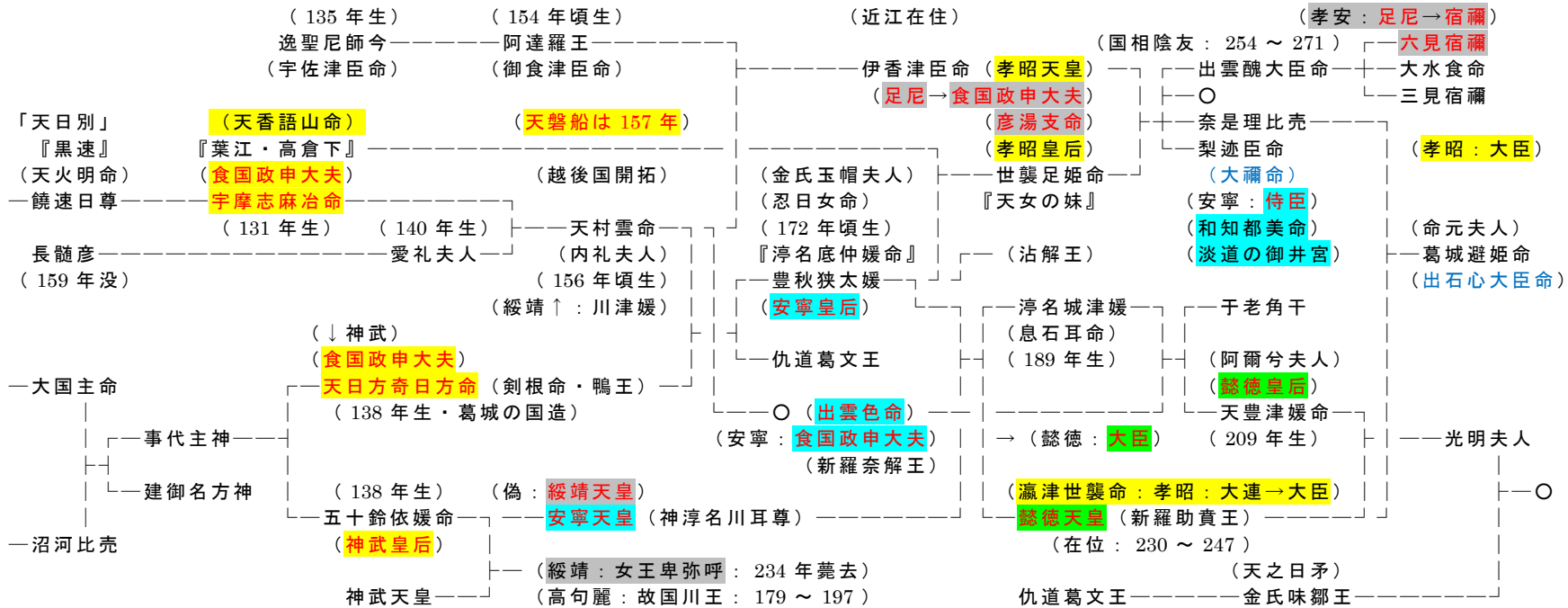
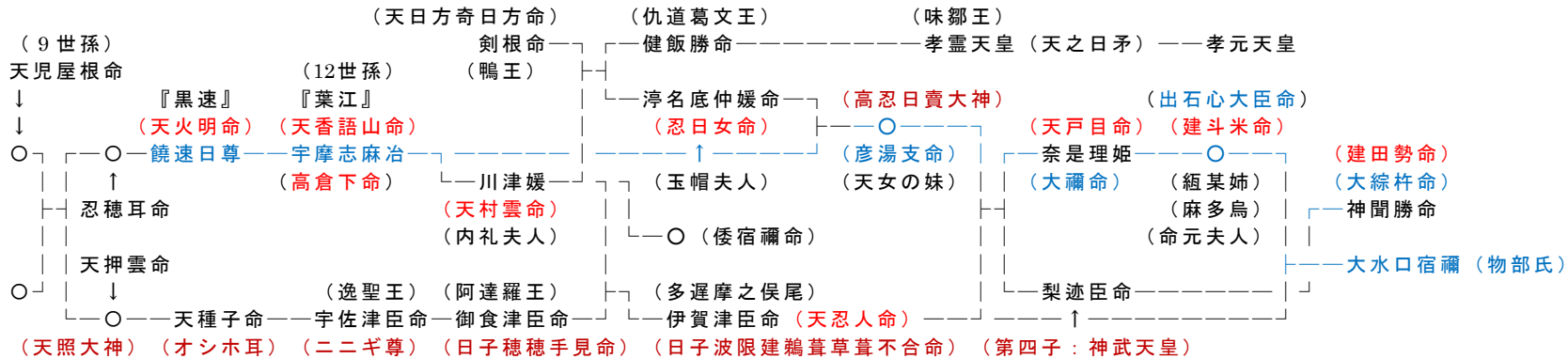
：大物主大神が、陶津耳命の娘の活玉依毘売と結婚して生まれた子は、「櫛御方命」。さらにその子が「飯肩巢見命」。
 ：さらにその子が「建甕槌命(たけみかづち)」。さらにその子が私、「意富多多泥古(おおたたねこ)」なのです。

<『日本書紀』(懿德天皇紀)より>

：母は、皇后の淨名底仲媛命(ぬなそこ・なかつひめ)と云う。事代主神の孫で、鴨王(かものきみ)の娘である。
 ：天豊津媛命(あめの・とよつひめ)を立てて皇后とする。

：<食国政申大夫>について
 ：<卷第五天孫本紀 物部氏系譜>
 ：(神武天皇)
 ：宇摩志麻治命と天日方奇日方命は
 ：共に食国政申大夫となった。
 ：食国政申大夫(おすくにのまつり
 ：ごともうすまえつきみ)は、
 ：今の大連(おおむらじ)である。
 ：亦は大臣(おおおみ)とも云う。
 ：天日方奇日方命は皇后の兄で
 ：大神君(おおみわのきみ)の
 ：先祖である。
 ※：「食国政申大夫(大連)」は、
 __：皇后の父親を指す言葉だろうと
 __：考えています。

◎：『古代豪族系図集覧』：物部氏・尾張氏・中臣氏と、新羅王族の關係 (備考：「高忍日賣大神」については、<ウィキペディア>参照)
 (おそらく、藤原氏による設計図)



卷第五天孫本紀 物部氏系譜

(神武天皇)

宇摩志麻治命と天日方奇日方命(あめのみかたくしひかたのみこと)は共に食国政申大夫(おすくにのみまつりごともうすまえつきみ)となった。食国政申大夫は今の大連(おおむらじ)である。亦是大臣(おおおみ)とも云う。天日方奇日方命は皇后の兄で大神君(おおみわのきみ)の先祖ある。

(綏靖天皇)

宇摩志麻治命の子の彦湯支命(ひこゆきのみこと)を食国政申大夫とした。

(安寧天皇)

母を五十鈴依媛命(いすずよりひめのみこと)と云う。事代主神(ことしろぬしのかみ)の娘である。淳名底中媛命(ぬなかわそこなかつひめ)を立てて皇后とし、皇后は三人の皇子を生んだ。出雲色命(いずもしこのみこと)を食国政申大夫(おすくにもまつりごともうすまえつきみ)とした。また、大禰命(おおねのみこと)を侍臣とした。両名とも宇摩志麻治命(うましまちのみこと)の孫である。

(懿徳天皇)

母は、皇后の淳名底仲媛命(ぬなそこなかつひめのみこと)と云う。事代主神の孫の鴨王(かものみきみ)の娘である。天豊津媛命(あめのとよつひめのみこと)を立てて皇后とする。食国政申大夫の出雲色命を大臣とした。

卷第五天孫本紀 物部氏系譜

宇摩志麻治命は大神君(おおみわのきみ)の先祖の天日方奇日方命(あめのみかたくしひかたのみこと)と共に食国政申大夫(おすくにのみまつりごともうすまえつきみ)となった。食国政申大夫は今の大連・大臣である。

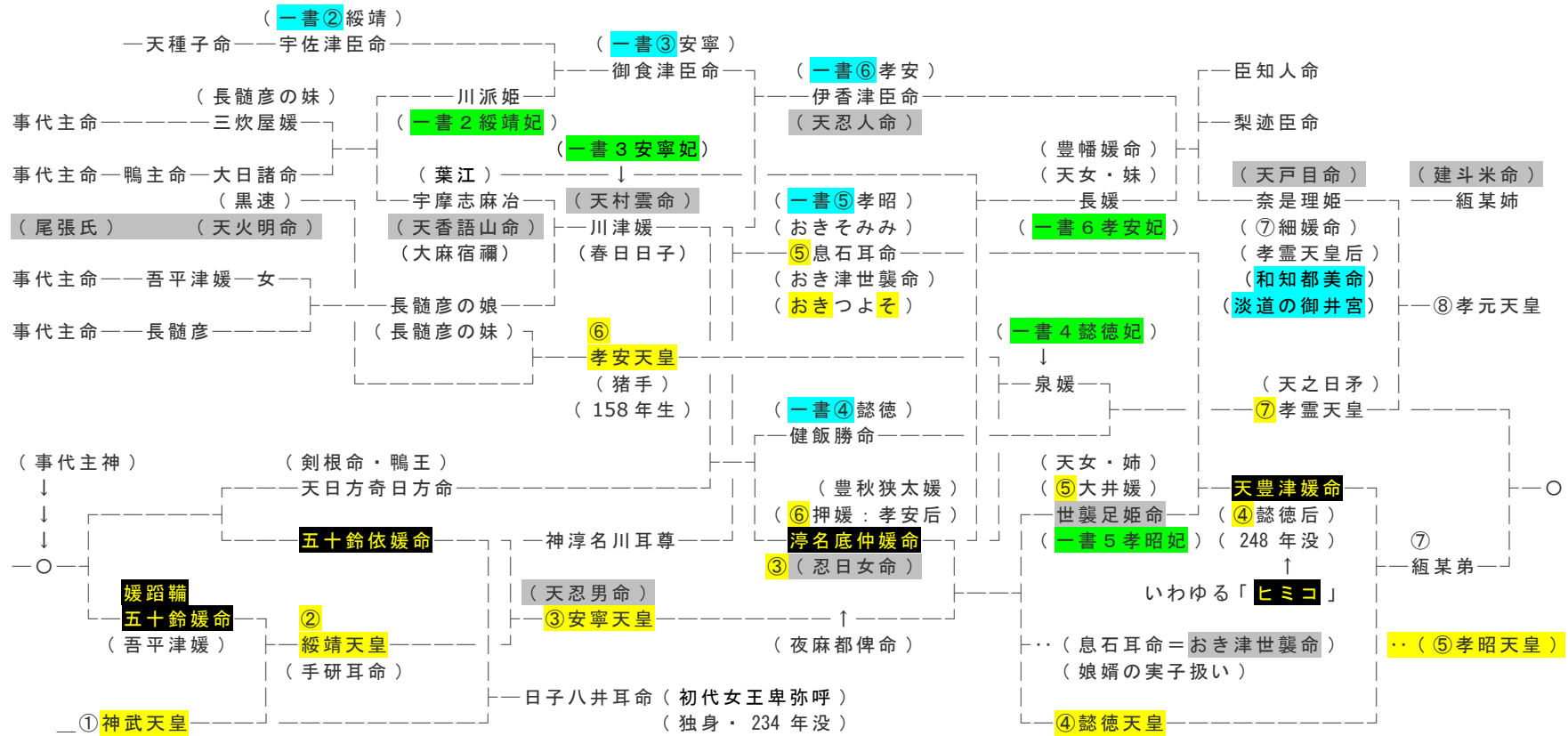
彦湯支命(ひこゆきのみこと)この命は、葛城の高丘宮(たかおかのみや)で統治された(2:綏靖)天皇の御世に初めは足尼になり、次に食国政申大夫と成って大神を齋奉る

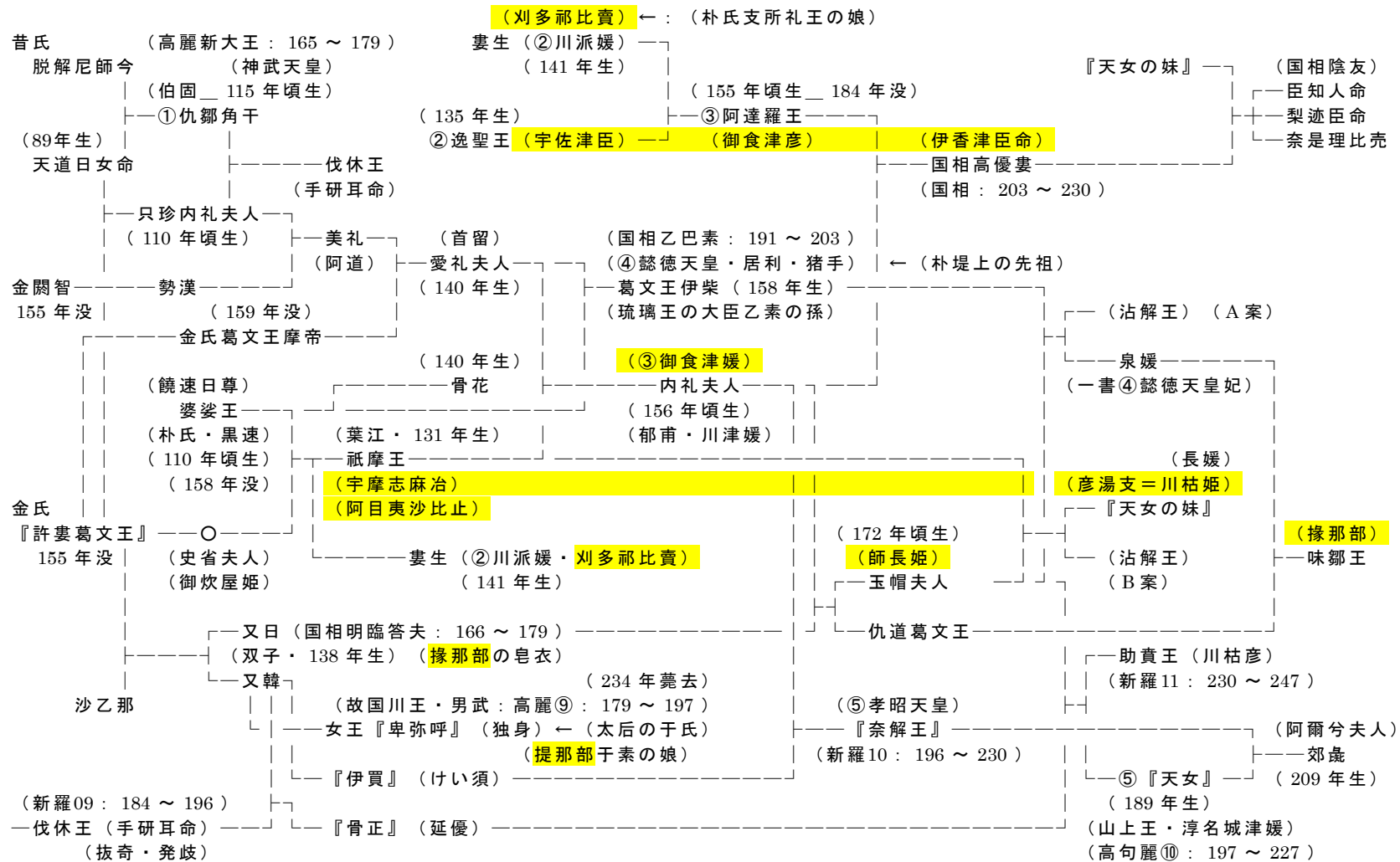
出雲醜大臣命(いずもしこおおみのみこと)この命は、軽地の曲峡宮(まがりおのみや)で統治された(4:懿徳)天皇の御世に初め食国政申大夫となり、次に大臣となって大神を齋奉る。その大臣の名はこの時より始まった。

『先代旧事本紀』卷第五天孫本紀 尾張氏系譜

瀛津世襲命(おきつよそのみこと)この命は、池心朝(いけこころのみかど)の御世に大連と成って仕えた。

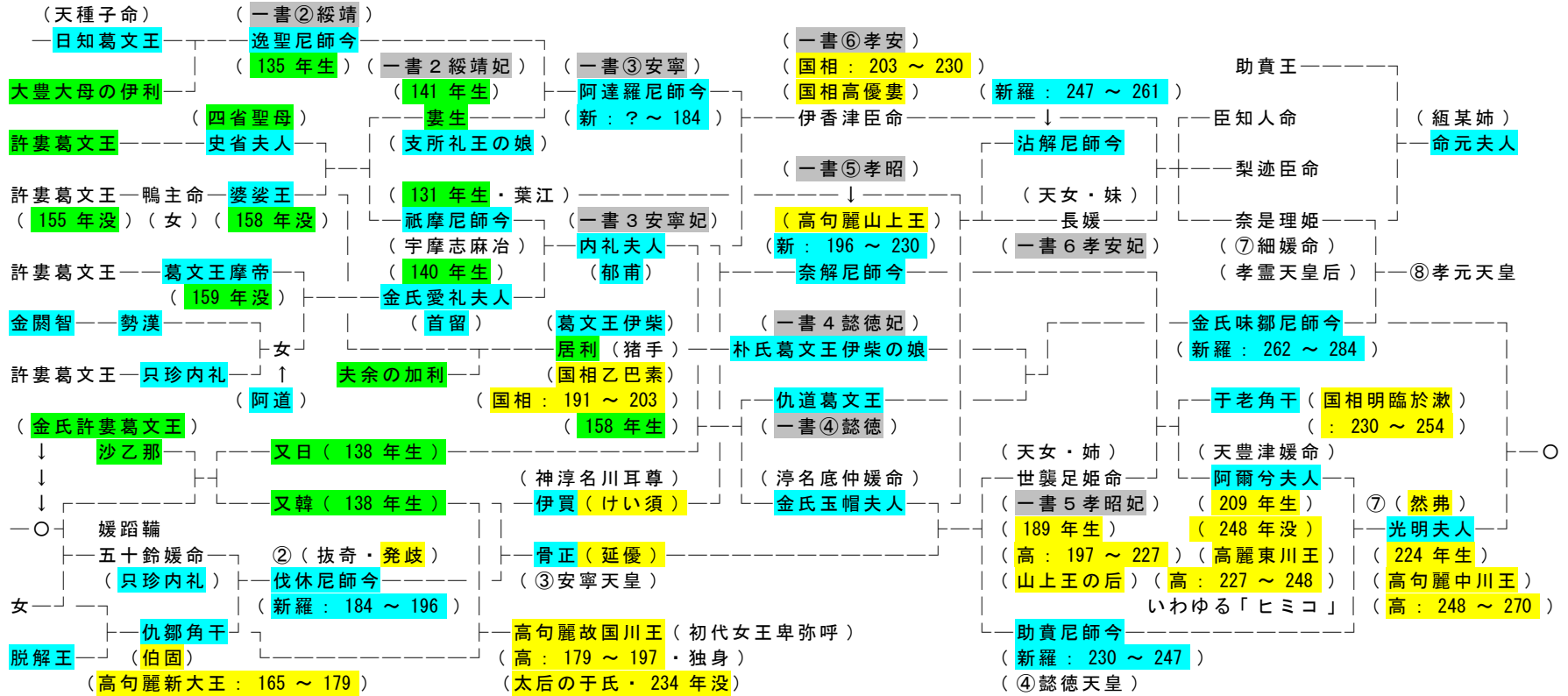
◎：＜日本書紀、本文と一書による、初代天皇から7代天皇までの構造：米田解析・合成による系図＞



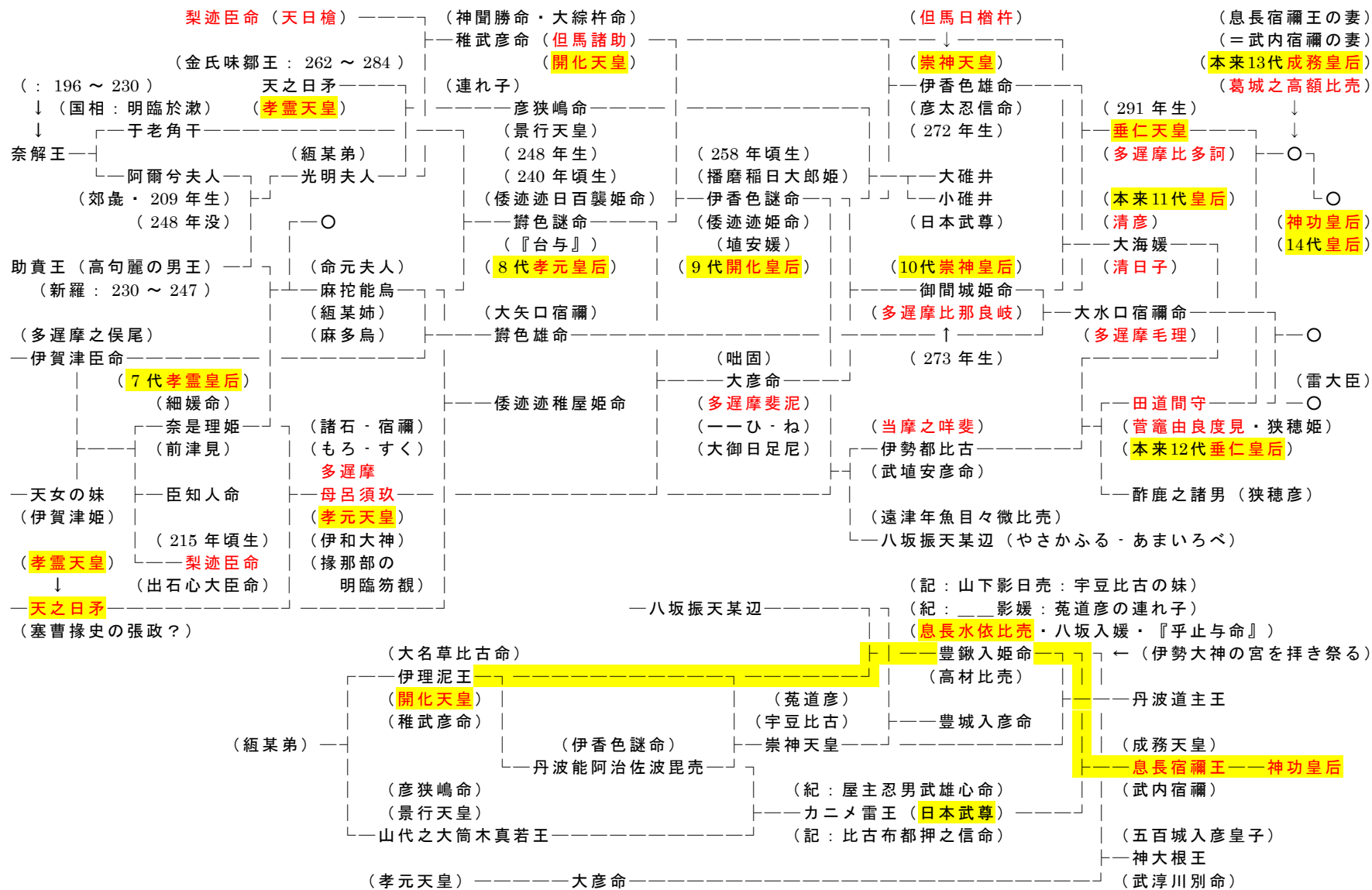


<『三国史記』と南堂朴昌和と彼の遺稿（娑婆尼師今記）による系図：米田解析・合成による系図>

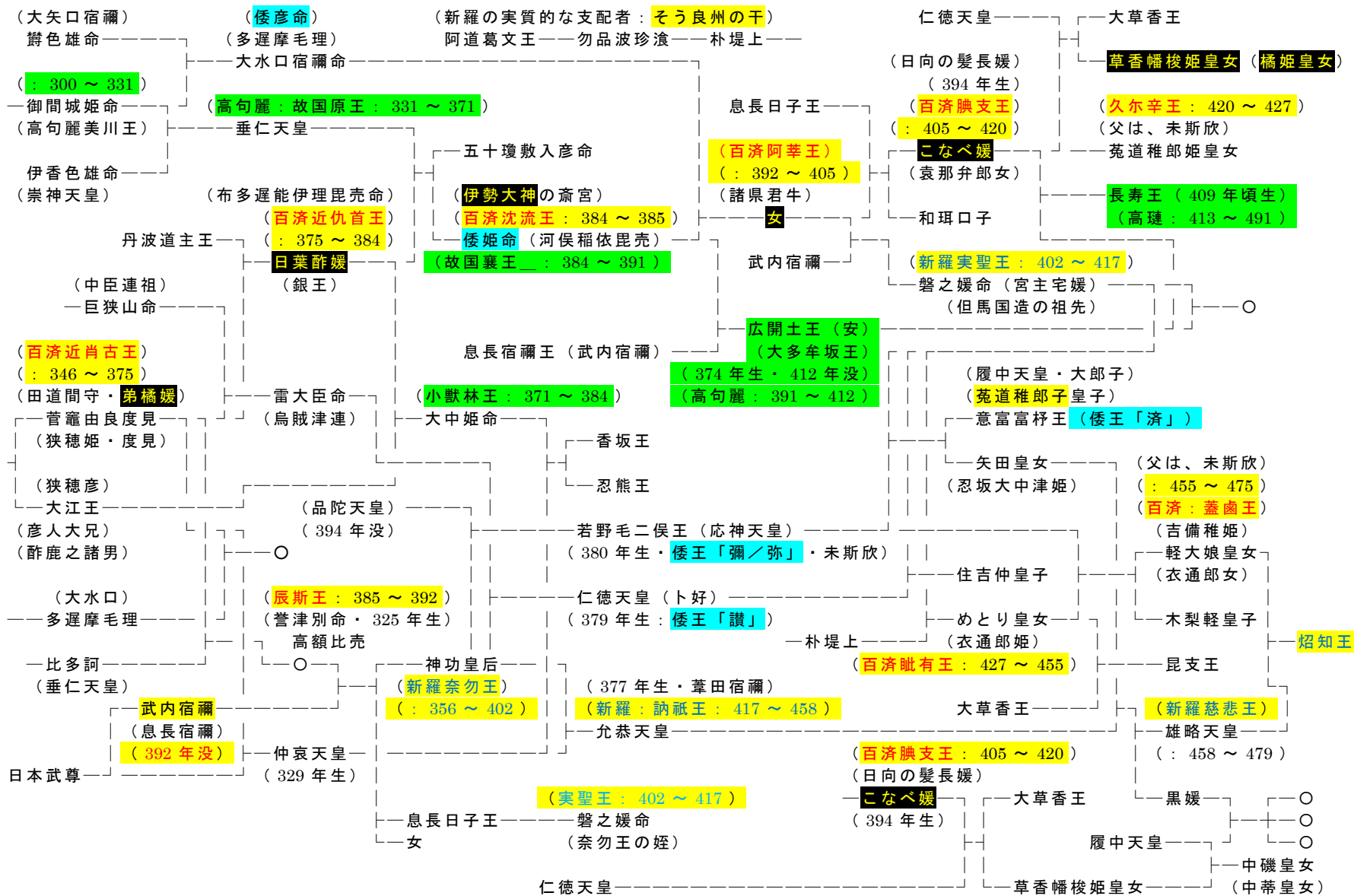
◎：P-10の系図を、系図線をほとんどそのままにして、『日本書紀』の人物を『三国史記』の人物に差し替えました。



※：登場人物とその出典。 ○○ …… 新羅本紀__に準拠。（「内礼夫人」の続柄を中心に考えて作図しました。初期の新羅王の在位期間は、外しました。）
○○ …… 高句麗本紀__に準拠。（「拔奇・発歧・伐休尼師今」は、同一人物。王名に「川」が付く人物を、女王としました。）
○○ …… 朴昌和の遺稿に準拠。（朴昌和の遺稿は、偽書と云われていますが、「娑婆尼師今記」の記述は、かなり正確です。）
○○ …… 日本書紀一書に準拠。



※：「日本書紀」の記述より：氣長足姫尊（神功皇后）は、開化天皇の曾（ひ）孫で、氣長宿禰王の娘である。母は「葛城之高額媛」という。



『古代豪族系図集覧』 (尾張氏の系図: P-286)

(珍と彌が別人の場合の「珍」) 衣通郎姫

